宮古市婦人防火クラブ連合会の活動内容

岩手県　宮古市婦人防火クラブ連合会

岩手県の市町村で最大の面積。三陸リアス式海岸の北端で、県庁所在地の盛岡市から直線距離でおよそ 90km 東に位置する。宮古は海岸の西にすぐ山地が峙えているために平野部が狭く、また周囲が山と海に囲まれているので「陸の孤島」になりやすい。V 字型の湾の両岸が奥に進むにつれて狭くなるリアス式海岸地形のために津波の被害も大きい。

平成 23 年 3 月 11 日発生した東日本大震災では、宮古港湾口合同庁舎付近では 9.6m、田老乙部野では 26.3mの津波浸水高を記録、田老星山 28.1m、重茂では 29.9mの津波遡上高を記録している。

田老港にある高さ 10m総延長 2,433m の「田老万里の長城」と称される防潮堤は、約 500m に渡って一瞬で倒壊し、津波が商店街や住宅地に押し寄せた。宮古駅前商店街では火災も発生するなど、未曾有の被災となった。

宮古市の死者 420 人、行方不明者 121 人、死亡認定者 107 人、住宅、建物被害（全壊数＋半壊数）4675（10 月 5 日・岩手県 HP データより引用）。

● **山内さんの場合**（沿岸部・磯鶏）

夫婦「てんでんこ」で逃げた

自宅の真向かいにある公園に展示している蒸気機関車を被う屋根は、小さな地震でも揺れてガタガタと音がする。3 月 11 日の地震では、私が今まで聞いたこともない激しい音がした。しばらくして「3mの津波警戒情報」が流れ、町内会長が逃げろと声を掛けてくれた。しかし、夫は「大丈夫だ」と言って逃げようとしない。「津波はてんでんこだから、私は先に逃げます」と言い置いて、隣近所に声を掛け合いながら公園の高台に逃げた。避難所は小学校だが歩く道の途中で「さぁ入って」と声をかけられ、そのお宅に避難した。その家の庭から、大きな黒い津波がゆっくりと押し寄せてくるのを見た。

高台への道は高齢者を自転車の荷台に座らせて坂道を避難してくる人や、徒歩の人の他、車で来る人も多く、道の両脇に車を駐車するので渋滞し始めた。町会役員と一緒に「車を畑に入れて駐車場にしたい」と持ち主にお願いしたら、畑が痛むことは承知で提供してくれた。公園に集まってきた避難者のためにテントを設営し、焚き火を提供した。

私を含め 6 人の婦防クラブ員（以下婦防）は、お世話になっている個人の家（避難所ではない）で炊き出しを始めた。古い釜を提供していただき、引き込んでいる山の水を使い、住民が持ち寄った米でおにぎりを作った。十分な量ではなかったが、約 50 人の人々に少しずつ分配できた。翌朝、自宅に帰ると床上浸水していた。自宅のプロ

パンは無事だったので家で米を炊き、避難している個人宅まで運んで炊き出しをした。
私は４日目に小学校の避難所に移動した。夫は被災した自宅の２階にひとりで最後まで居続けた。お互いに命には別状なかった。私たち夫婦は「てんでんこ」を実践した。家は残ったが、庭の木々は枯れ、草花は見当たらない。

地域住民総力で手を差し伸べる

私の地域は、婦防は全戸加入が原則だ。今は登録者であることすら認識していない人もいるし、知っていても不参加を決め込む人もいる。しかし、今回の被災支援には多くの婦防、そして住民の方々が協力してくれた。大量調理に慣れている人もいてメニューを工夫することができた。

個人宅に避難した高齢の女性は、息子家族が引き取りにきても「ここはみんなで一緒に楽しくご飯が食べられるから帰りたくない」と、迎えを拒絶する人がいたほどに心配りのあるお世話があった。その家の方の疲労はかなりのものだったろう。私は自分のいる避難所をベースに、個人宅避難者や周辺の避難所を循環訪問し、安否確認と情報収集、避難者へのお見舞い、そしてそれぞれの避難所で支援活動をしている婦防の仲間との相談事対応などの連絡係を続けた。

避難所被災者の要望が多くなる

自衛隊の支援が入る前、食材は近隣住民の供出なので、豊富でないし偏りがあったが、上げ膳・据え膳の炊き出しだった。個人宅避難の被災者からの「コーヒーはないんですか」という発言に、「食材は住民の皆さんの持ち寄りだし、お茶しかないんですよ」と、一応丁寧に応対したが、嗜好品までは手が回らない。

民生委員から情報を聞き、高齢の独居者（在宅避難者）にも炊き出しを届けた。宮古市民が利用する大きなスーパーが破壊され、在宅の人は買物も不自由だった。私は、生きるには「食べることが一番」と思っている。停電なので自宅のストッカーの中身も全部提供した。冷凍保存していた特上の荒巻鮭は、ちょうど良い加減に解けていたので夫に切り分けてもらった。人数に分けると本当に小さい一片になったが、しょっぱい味が好評だった。

支援物資の配分は平等に

被災から日が経つに連れて小学校の避難所には溢れるほどに物資が集まった。避難所被災者だけでなく、町内会の班ごとに在宅避難者にも物資を分けた。「同じものが再度来ることはないよ。隣と違うものが来るのは同じものの数が揃っていないからよ‥」と、最初から個々に伝えながら配ったので、分配に関しての苦情はなかった。

小学校避難所で校長が率先支援

避難所となった小学校の校長は学校設備を快く提供してくれた。山間部の自宅には戻らずに、不眠不休の支援活動を担っていた。校長の率先した行動に PTA も賛同した

ようで、気持ちよく手伝ってくれた。

訓練の大切さを再認識

今までも避難訓練を実施していたが、内容も参加数もおざなりになっていたことを痛感する。現在、会員はバラバラに散らばっている状況。集りは、まだ出来ない。

最近、夜中に津波警報があった。私はリュックサックを背負って公園の高台に向かった。夫はしぶしぶ後ろに付いて来た。「てんでんこ」なのだ。高台に集まったのは全部でたったの 5 人だった。あのすさまじい被害にあったのに、喉下を過ぎたら「1000 年に 1 度の未曾有な震災はこれから 1000 年後」と思ってしまっているのかもしれない。がっかりした。

地震発生後に停電になったので、警報を聞いていない人もいた。「防災無線を聞いてから・・」とか「テレビの情報を見てから・・」とか、今の若い人たちは情報を確認してから行動するような感じ。もちろん正確な情報の獲得は大事だが、それを聞いた時はすでに遅いかもしれない。先人の津波に関する伝承を真摯に受け止め、常に心に刻んでおくことや、いつもと違う状況を五感で受け止める感性も大切だと思う。川の近くに住む人が、家の中にいたけれど「川の音がいつもと違う」と気づき、すぐに逃げたと聞いた。

地元ならではの活動に評価

津波襲来後、お墓の上に消防車が乗り上げていた。消防団員が水門を閉めに行って流されたのだ。消防団員は泳いで逃げて助かった。本当に良かった。婦防では今まで消防団の炊き出しや洗濯などの後方支援を担ってきたが、震災で避難者の方々に目に見える支援活動を行ったことで、多くの人たちが「婦人防火クラブ」のことを知ってくれた。さらに婦防への理解が進めば嬉しい。

私はいただいた役目を一生懸命にやっているだけ。夫は元船員で遠洋航海に出ると長いこと不在が続いた。その間に 2 人の息子を育てるには周囲の人にお世話になった。だから地域に恩返してお役に立ちたい。困っている人を見たら助けたい気持ちがあるし、活動は良いことなのだから続けていきたい。

●盛合さんの場合（沿岸部・重茂）

職場で炊き出しのリーダーに

県の保健福祉環境センターで非常勤の勤めをしている。当日午前中は外出、午後 2 時頃に職場に戻り、仕事を開始した時に揺れが来た。同じフロアーの職員たちはいつものように、「どうせ大したことないよ・・」とおちゃらけたので、私は「何ふざけてんのよ、早く机の下に入って」と叫んでしまった。

「津波が来た」との情報が入ってきた。自宅は危険地域なので心配だったが、これほ

ど甚大な被害を引き起こすとはその時は思わず、携帯電話も通じないし、国道は車が動かせない状況下、ここに留まるのが良策だと判断した。しばらくするとセンターは避難所指定の施設ではないのに避難者が 400 人ほど入ってきた。上司から「防火クラブ員会長だし経験者だから、炊き出しをやってください」と言われた。突然のことで何も備蓄はない。職員は近くのスーパーや商店にあるものを買いに走った。私はセンター内の食堂に残っている米でおにぎりを作り、避難者に提供した。

２日目の昼頃に市内で働いている息子が職場を訪ねてきた。夫は道が不通になってしまったので山のけもの道を 3 時間歩いて来てくれた。連絡は全くつかないし、私は出張も多いので、家族と親戚連中は「あいつは死んだのではないか」と案じたそうだ。私が炊き出しで頑張っている姿を見て「拍子抜けした」と後で夫から言われた。

地元の避難所で炊き出し支援

翌 12 日の夜 6 時頃センターを出た。私はクラブの会長なので自宅に帰る途中に地元の避難所に立ち寄って状況を聞き、明日からは私たちが炊き出しをすると伝えた。自宅は無事だったが停電で明かりはない。仕事は 1 ヶ月休みとした。最終的には 2 ヶ月間、地元での支援活動に従事した。

13 日からクラブ員が中心となって避難所の炊き出しをした。地域には 4 つのクラブがある。私の担当した避難所ではクラブ員 65～70 名を 10 班にわけて当番制での活動体制を組織した。庭にテントを張って野外食堂のように設え、被災者だけでなく消防団とか医療ボランティアなどの外部からの来訪者にも、炊き出しを提供した。

自治会の男性も力仕事など、さまざまな場面で支援活動を担っていた。メニューは豪華だった。ストッカーが停電になったので個人宅や漁協からもサンマ、カニ、鮭フィレなどの豪勢な食材がふんだんに集まった。米は当初は個人の持ち込みで賄い、途中からは漁協からの支援米を使った。ごはん・味噌汁とおかず 2 品を提供した。炊き出しの管理者として、冷蔵庫は使えないから生ものは即使うが、食材が途絶えるかもしれない時の用意として常に食材の在庫を管理把握し、きめ細かい采配をした。

避難所被災者の心痛を考慮し、彼らが遠慮しないように 3 食上げ膳・据え膳の炊き出しだった。ひとつの素材で汁物・焼き物・ムニエルなど調理の工夫で飽きないようにしたが、被災者からはサンマの焼き方に文句が出るなど、要求はどんどんエスカレートしていった。

私は毎朝 5 時には避難所に到着、夕方 7 時半まで避難所で活動したが、当初は控え目だったのに、1 週間ほど経つても彼らは手伝う訳でもなく、ぶらぶらしているだけ。「被災しているのだからやってもらうのは当たり前」の態度になってきた。親たちは子どもたちが配膳台の上に乗っても注意しない。遊ぶところがないのだからと大目に見ていたが、これではいけないのでは・・と思い始めた。

私たちは、家は残ったけれど、漁に出ることもままならず、収入の道が途絶えた被災者でもある。家は停電でローソク生活、テレビも観ることはできない、暖房もないから寒い。しかし避難所は発電機で煌々と灯りを付け、暖房もあり、テレビも観れる。

朝、避難所に到着したら彼らがモーニングコーヒーを楽しんでいるのを見て、「これってなんだかおかしいのでは・・」と思ってしまった。在宅避難者からは避難所被災者をうらやむ声も聞こえてくるようになった。

１週間が経過した時に、避難所の被災者と話し合いをした。炊き出しはカフェテリア方式にする、トイレ掃除は自分たちで行うことなどを取り決めた。私たちの炊き出しは基本的に家庭料理だが、彼らからは外食のようなものが食べたい、自由にしたいという意向がなんとなく感じられるようになってきた。他の場所に移動する人も多くなり、被災者数も減少してきたので、3 月末で炊き出しは終了した。

以後、避難所に残った人たちは支援物資を家族単位に分配、家族ごとに料理するようにしたようだ。それで良かったのだと思う。私たち支援部隊は、被災者の自主性を生かす方法も、見つけていかなければならない。

支援物資配布の工夫

避難所での炊き出しを終えて、4 月からは各方面から届けられる支援物資の配布を担当した。支援物資は質量ともに潤沢なので、基本的に地域 430 世帯に均等に分けた。住民の家族構成や被災状況を知っているので、それにふさわしいものを臨機応変に優先的に配る。衣類とか生活用品物資は小学校の体育館に全て広げて、そこで欲しいものを選んでもらった。パンツなどの下着類はすべて均等に渡るよう配慮したので、文句はまったく出なかった。7 月末の避難所閉鎖時には婦防の仲間が全員集まり、感謝を込めて掃除、元の姿に戻して活動を終えた。

活動の役割分担を決めておく

危機に際して、それぞれの人間性が見える場面にたくさん遭遇したのは、私にとって良い体験だった。「津波の時は家の開口部を開けて逃げろ、寝る時には衣類はすぐに着れるように枕元たたんでおけ」といった言い伝えは、幼い頃から身に沁みている。しかし、最近の若い人はそれらの伝承を無視しているのか、災害への認識が違うように感じる。津波警戒情報を聞くとわざわざ海を見に出掛けたり、防波堤があるから大丈夫だとか、津波の言い伝えが希薄になっている傾向がある。行政やさまざまな機関が津波の知識や避難について情報を流し、配布物も多いのに真剣に見ていない。

今回の被災体験は生きるか死ぬか、今後の生活の維持も見通せない状態になったのだから、人々の意識は変化したと思うし、また本当に意識が変らないと困る。行事化している避難訓練ではダメだ。きちんとしたリーダーがいること、役割分担を決めて常に緊張感を持たせること、また家庭内での防災用品の常備と定期的点検、地域の自主防災機材定期的点検が必要だ。今回の支援体験で一番重要なことは、火急の場合の役割分担が決まっていることだと痛感した。もちろん代行役も決めておく。

使命感とふるさとへの愛

婦防のリーダーとしての使命感が活動の支えだ。地域のつながりの中で生きている

私たちは「結い」（ゆい）の心で、何かあったら互いに助け合う心が根付いているし、そういう中で育ってきた。私のふるさとを愛する気持ちは強い。「みんなで支え合って生きる」ことを次世代につなげていきたい。火急の課題として災害に対応できるリーダーの養成が必要だ。

●工藤さんの場合（沿岸部・熊野町）

議場で見た津波の一部始終

市議会議員。震災当日は議会の最終日で、市役所の 6 階議場に居る時に地震が発生した。今まで体験したことがない、立っていられないほどの揺れだったので津波が起きると思った。最上階で安全だからと指示があり、翌朝まで 6 階に留まった。携帯電話は不通でどこにも連絡は取れない。窓から海岸方面を見る。引き波になり、次に水位が上がって最後の波で車が流され、町が破壊されるのを目撃した。停電なので椅子から立ったり座ったりしながら寒さに耐えた。クッキー 1 枚に小さいお茶のペットボトルが配布された。夜の空は星がきれいだった。

翌朝 10 時に家族が迎えに来てくれたが、車までの道はガレキが散乱、ヘドロもすごい。スーツ姿で前の人のヘドロの深い足跡をたどって歩いた。市役所は 2 階まで浸水、波の力で什器や設備が吹き抜け流されたが、その空間があったので市役所の建物は流されなかった。窓を開けていた家は（中は散々だが）家屋は助かり、窓を閉めていた家はそのままの状態で流されたと聞く。「津波の時は窓や玄関などの開口部を開け、火を消して逃げろ」との言い伝えは昔からの伝承。自宅は高台なので無事だった。

支援内容に格差

当初、婦人防火クラブ（以下、婦防）は壊滅状態、会員の安否も避難先も分からずバラバラの状態だった。支援活動は、クラブ員が要請しなくても地域内で応援できる人が自発的に参加していた。近くの小学校避難所には 300～400 名の避難者が集まった。ドラム缶で焚き火をして暖をとりながら煮炊きもする、食材は近隣の方々の提供で賄うなど、それぞれ工夫しながら自衛隊の支援を待ったが、寒くて衣類も不足した。

避難所では地域の湧き水を利用し、3 食の炊き出しをした。避難所の被災者は「自分たちは家を失った被災者なのだ」という意識が強い。在宅避難で不便な生活している人も同じ被災者だが、生活物資を購入しようと残ったスーパーに出掛けてもモノはない。同じ被災者なのに、置かれた環境によって「支援の格差」が生じた。

安否情報を伝える

私は近隣の避難所をめぐって人々の安否情報や避難所被災者情報を更新していった。被災者は同じ避難所に居続ける訳ではなく、時々刻々と状況は変化する。避難所間の移動、他地域に移転移住、また被災した自宅に戻るなど常に居住先は変っていく。

家族・親戚や知人の安否確認依頼に応えるべく各避難所を訪ねて、正確な被災者名などを確認していく。しかし在宅避難の人の確認作業にまで目が届かなかったのが現実だ。提供する情報は正確でなければならない。言葉だけでなく書いたものを確認しなければ伝達としては不十分だと認識した。平穏な生活では感じないが、災害の時には互いに助け合っていかなければ生きていけない。これまでの婦防の地道な積み重ねの活動があるからこそできたことも多かった。非常時に対応する婦防の訓練や経験、そして強い連携が幸いした。

避難所には情報が集まる。最初は「大変だったね。助かって良かったね・・」と、相互交流はすんなりできていたが、時間が経過するにつれ、個々の状況が変化していくたびに関係がぎくしゃくしてくる。人間関係は微妙なことで変化する。家が残り自分で買い物や情報収集をできる人が「避難所では 3 食食べられていいじゃない・・」などと、被災者をうらやむ発言も聞こえてきた。

情報は自分の足で獲得する

自宅に留まっていたら情報は得ることができない。在宅避難の人は「聞いてない。知らなかった」とよく口にするが、基本的に自分の足を使い自分の目で確かめることが重要だ。もちろん高齢者や弱者に対しての配慮は欠かせない。また、情報は大切だが速報が正しいとは限らない。聞いてから、見てから避難するのでは遅い。逃げ遅れないためには情報だけに頼らず、まず自助であることを認識して欲しい。

今後避難所格差は是正したい

避難所によって避難者受け入れの体制が異なった。避難所の学校長に決定権があるので、その方の人格や考え方で支援体制が異なってしまう。小学校では設備利用の許可、校庭での焚き火も OK だったが、ある中学校長は教育施設の設備の使用はまかりならぬと許可しない。被災している在校生もいるのに、なんだかおかしい。学校長としての責任より、人命救助の方が大事ではないか。学校は「避難所指定場所」なのだから避難所としての一定の受入れ基準設定が必要と思う。

自助・共助が根付く地域

この立場になったら､困っている人がいれば出来る部分は進んでやるのが当たり前。私たちの地域には「自助・共助」の心が昔から続いている。

●コメント

宮古市の地域コミュニティの絆は強い。婦防のリーダーは、自分の役目に誇りと自信を持ち、臨機応変で機敏な支援活動を貫徹した。共に暮らす夫婦でも昔からの伝承「てんでんこ」を実践し、支援活動に駆けつける共助の行動がある。

「結い」とは、近代以前から日本に存在した、集落や自治単位に地域のインフラの維

持に関わる、労力、資材、資金などを提供し合い、助け合う活動を指す。地縁に基づく絆の強い「近所付き合い」である。

今回は、災害時の情報提供や避難所の運営について多くの示唆を得た。

「人々のニーズに対応したい、炊き出し以外にも支援したいと考えて社会福祉協議会に申請に出掛けたが、活動人数や内容などを書いた書類を提出し、許可を得なければ活動できない。火急の事態なのに、机の上でしか考えない形式主義。改善を願いたい」との意見もあった。

「顔と名前を知っている」住民への支援活動は婦防ならではのものだが、高齢化・過疎化が押し寄せている。また婦人消防協力隊（男性が冬季に出稼ぎに出る事が当たり前だった時代、消防団員不在の時の代理として女性による消防団が組織された）と、婦人防火クラブ（消防団の後方支援）は、合併してうまく融合している地域もあるが、今もって両方のこだわりが残っている地域もある。リーダー役としては頭が痛い問題のようだ。

ふるさとを共助の心で支援する方々の活動は、必ず復興の礎となると受け止めた。陸中海岸を望む高台から見た朝日はことのほか美しかった。明けない夜はない。貴重なお話をありがとうございました。　　（インタビュー及び報告書作成：宮川智子）